

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】(2ユニット共通/なごみ、あかりユニット)

事業所番号	2794200622		
法人名	株式会社WAN		
事業所名	グループホームお多福の家		
所在地	茨木市真砂玉島台10番26号		
自己評価作成日	令和5年8月20日	評価結果市町村受理日	



※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ニッポン・アクティブライフ・クラブ ナルク福祉調査センター		
所在地	大阪市中央区常盤町2-1-8 FGビル大阪 4階		
訪問調査日	令和5年9月7日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者様にとっての「我が家」であるように、「家」という点にこだわりその人らしい生活を実現できるようにサポートする。認知症ケアにおいては生活リハビリに加えレク活動費活用でレクリエーションの充実化を図り、QOLに関してもレク活動費活用により食事のグレードアップ、鍼灸リハビリ訪問を取り入れたことでADLも加え向上している。会社の代表が医師で会社内に訪問看護ステーションがある為、他のグループホームよりは「医療面」の柔軟な対応が可能。現在は認知症診療訪問を利用し、施設内で診察が可能になるように取り組みが始まっている。2階には障害児童が通うデイサービスがある為、児童幼老一体型施設である点を活かし、世代間交流がある。家族や外部の方を招くイベント開催を行えるように尽力し、感染症対策を実施しながら家族や地域との交流強化に取り組み始めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は平成30年3月、大きな公園や学校がある静かな住宅街の一角に開設された。鉄骨2階建ての1階にあり、2階には障がい児童の放課後等デイサービスを併設している。夕方からは子どもたちの元気な声がかつて建屋全体に活気が伝わっている。子どもたちとは敬老会等で交流もあり利用者の楽しみとなっている。開設者が開業医であり、主治医でもあるので家族や利用者に医療面での安心感を与えている。また医師の意向で利用者が束縛感を感じないように館内を自由に移動ができています。晴れの日には利用者は食堂の勝手口から出て洗濯干しを手伝ったり、ベンチで談笑をして過ごしている。事業所では利用者全員の日々の様々な場面(花見、散歩、調理など)の姿をSNSアプリに掲載するとともに館内にも掲示しているので家族に大いに喜ばれている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	【本評価結果は、2ユニット総合の外部評価結果である】	

自己評価および外部評価結果【2ユニット総合外部評価結果】

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	管理者・スタッフ共に理念の共有をした上で、会社理念をもとにグループホームのコンセプトを掲げ、新入職員にとってもわかりやすいように、全職員で意識共有ができるように図っている。利用者様にとってより良い認知症ケアを行えるよう指導、悩みや疑問等を十分に共有し実践に繋がられている。	管理者が職員と共に、法人の理念を踏まえた事業所独自のコンセプトを策定している。管理者はこのコンセプトの意味を具体的に解りやすく解説して玄関フロアに掲示し、職員に出勤時には必ず一読して確認し、業務に当たるように指導をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍でも、少しでも地域の方と交流ができるように自治会に入り、清掃活動参加や自治会主催の行事に場所の提供などを行っている。また、今年は近くの高校との交流会なども実施できた。	事業所は開設当初より自治会に加入して、地域に受け入れられるように努めている。自治会の清掃活動には必ず参加し、事業所前に流れる水路の清掃も行っている。最近では近隣の高校のダンス部の生徒がフロアでダンスを披露して交流をしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 ”	コロナ情勢を見ながら活動を考えていきたい。事前準備として、ケアマネがキャラバンメイトの資格取得中。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を開催していた頃は、ご家族様からの意見などをサービス向上に活かす努力を行っていた。今はコロナ職員感染などが理由で集まったの開催ができていない。早急な再開を検討し、家族様からの意見をいただき更なるサービス向上を図りたい。	開設後の翌年にコロナ禍が起こり、その後は対面の運営推進会議を開催出来ていない。その間は報告書を2か月に1回、地域包括支援センターと全家族に送付している。報告書には、利用状況、レクリエーション・行事の活動状況、研修・勉強会内容、事故報告を記載している。最後に意見や要望や質問を求めている。次回は対面開催を予定している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日頃から、地域包括と連携を図り空室状況等を伝えるなどの働きかけを行っている。過去に、地域包括から紹介してもらった困難事例のある方を受け入れ、今は穏やかに生活されている。	管理者は市役所の長寿介護課、福祉指導監査課に事業所運営に不明な点があれば直ぐに連絡をして、解決を図るようにしている。市役所の介護情報発信サイト「ケア倶楽部」に登録して様々な介護に関する情報を得ている。地域包括支援センターとは常に情報交換をしている。市の介護相談員を受け入れて利用者の支援に役立っている。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	2カ月に1度、身体拘束適正化・人権擁護高齢者虐待防止委員会を開催し、スタッフ全体に周知を行っている。現状、身体拘束は行わないケアに取り組めているが、不適切な対応など見受けられた場合には個人指導と、その都度委員会やカンファレンスで議題として話し合いを実施するよう取り組んでいる。	事業所は身体拘束適正化指針を策定し、偶数月に委員会を開催し、職員研修を毎年2回実施して、職員が身体拘束のない適切なケアを実践できるように努めている。事業所ではセンサーマットの使用についても職員間で議論を重ね、適正な使用となるように努めている。利用者が、1階のフロア内を自由に行き来でき、束縛感を感じ無いうように配慮をしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	上記同様、委員会を開催し、日々のケアの中で虐待に繋がりそうなケアはないか確認を行いながら、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	研修やカンファレンスで時間を設け、その中で権利擁護やそれに付随する制度について理解を深められるよう取り組んでいる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時の説明等については、しっかりと行っているが、日々の中で出てくる疑問等についてもその都度説明を行い、理解・納得していただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議等で聞き取りを行った上で、管理者やCMを初めスタッフと共に検討を行い、運営に反映できるように実施し、外部者へも公表できるように努めている。コロナ禍で聞き取りなどできない場合は電話連絡やメールなどの手段を用いて可能な限り聞き取りを行えるよう努めている。	コロナ禍の数年間、家族の自由な面会の再開の要望が強いため、利用者の様子をSNSを利用して発信することに努めてきた。新型コロナが感染症5類に移行後は、家族面会の制限を解除した。家族には二重マスクなど十分な感染対策を求め、居室内での面会のみを許可している。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	概ね、月に1度カンファレンスと業務ミーティング実施、介護主任との情報共有、適宜面談も実施しその中で出た意見や提案をまとめ管理者から代表者へ報告を行った上で検討し反映できるように努めている。	管理者は、半年に1回全職員と面談をして双方の意見を交換しているが、日常的にも話し合って意見を聞くようにしている。直接話が出来ないときはSNSを利用して話を聞いている。利用者に関することについてはカンファレンスの中で意見を聞いて解決を図っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日々、介護主任やスタッフからの声を聴きとれる様にコミュニケーションを図り、必要に応じて適宜面談等を行い集約している。管理者から代表者へ報告を行った上で検討し反映できるように努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	個々のケアへの考え方や捉え方、介護技術、スタッフに応じた力量などを把握し研修・勉強会またはそのスタッフに応じた個人指導を行えるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	大阪府や茨木市からの情報把握に努め、同業者とのコミュニケーションの場にも出向き、情報共有やネットワーク作りなどを行えるよう努めている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前の面談はCMと介護主任で実施し、お話をしながら各視点からの情報収集を行っている。入居直後は生活する中で、本人や家族様からの情報収集などもしっかりと行い、本人にとって居心地の良い安心できる場所の確保ができるように関係づくりに努めている。		

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前の面談はCMと介護主任で実施し、お話しをしながら各視点からの情報収集を行っている。困っている事、不安な事、要望に関しては耳を傾けるだけでなく、入居直後は特にこちらからも積極的に声掛けを行う様に努め、より良い関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	会社内に訪問看護ステーションがある為、他のグループホームよりは「医療面」なども入居時からフォローが可能。その他のサービスについても適宜見極め対応に努めている。実際に訪問看護を利用し、病院へ行く事を最小限に押さえたり、骨折入院後のリハビリを行ってもらうことで家族様や入居者様の負担やコロナ感染リスクの軽減に繋がっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフ一人ひとりが、お多福の家のコンセプトやグループホームとしての在り方を理解した上でケアにあたっている事もあり、そういった関係を築けている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人からの要望があった際には家族へお伝えし、本人と家族との絆を感じていただけるようにスタッフ一同支え、時には本人を家族が支えられる様な場面を設け、職員と家族の関係を築けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人との普段の会話などもしっかりと聞きとる中で、家族からお話を伺いながらできる限り関係が途切れないように支援し、感染症対策実施の上で遠方の方の面会も積極的に受け入れている。	本年、新型コロナが感染症分類5類に移行後は、家族面会の制限を解除し、居室内での面会は自由にしたので家族や知人が訪問をしている。家族との外出も自由に行っているが、但し密な場所への外出は禁止をしている。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	スタッフは、利用者同士の関係性を把握した上で孤立する方がいらっしやらないように支援を行っている。また、利用者同士も気遣いの言葉などを掛け合える様な関係を築けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も連絡を取ったり、可能な限り相談・支援に努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の意向を大切に生活していただけるよう、可能な限り努めている。コミュニケーション困難な方はその方本位で検討している。	大半の利用者は言葉が発出できるので職員は利用者の思いや希望を把握のため一人一人に声掛けをして傾聴をしている。声を発せられない会話が困難な人には顔や目の表情を読み取るように努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の面談はCMと介護主任で実施し、お話しをしながら各視点からの情報収集を行っている。入居後は普段話される内容やご家族様からの聞き取りなどを行い、把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	普段の生活の中で観察や状況を確認・把握し、施設医や訪問看護師とも情報共有をしながら現状の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	カンファレンス・担当者会議にて、日々の変化からの気づきや意見・アイデアを出してもらい介護計画作成を実施できるように努めている。	計画作成担当者は日々、事業所のSNSアプリにあがった職員の意見や介護記録を確認して毎月、モニタリングを行い、合同カンファレンスで話し合っアセスメントを行っている。主治医や看護師の助言、家族の希望を参考にして長期1年、短期半年の介護計画書を作成し、家族に承諾を得ている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	スタッフ間での気づきも多くあり、個別記録として介護記録に記入する欄を取り入れている。カンファレンスでは全職員で情報共有をしっかりと行い、介護計画の見直し等に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時によって多少のズレなども生じるが都度確認を行いながら、柔軟な支援やサービスの多機能化ができる様に取り組んでいる。少しずつADL低下が見られてきたので、今年から鍼灸リハビリの訪問を取り入れ、拘縮や筋力低下している方に対する施術を取り入れ始めた。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	茨木市ケア倶楽部を活用し、以前よりは地域資源の把握を行えているが、コロナ情勢の事もあるので現状満足いく活用とまでは至っていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	代表が協力医療機関の医師であり、コロナ渦であっても週1回の往診で都度適切な医療を受けられるように支援を行っている。状態の変化があった場合はすぐに家族へ報告を行い、受診相談も実施している。	入居時に利用者・家族と相談の上、全員が協力医療機関の訪問診療(内科 週1回)を受けている。歯科は希望者のみ週1回の訪問診療を受けている。受診内容はラインワークスにより職員間で共有し、家族には電話で説明している。認知症外来、整形外科は必要時に家族・職員同行で受診している。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	会社内に訪問看護の事業所がある為、報告・相談も取りやすい環境である。管理者・GM・介護主任間において日々連携する中で、看護師への報告・相談も必要に応じて適宜行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院者がいる場合は、病院関係者とも密に連絡が取るよう努め、訪問看護の利用も含め早期退院検討に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・週末期に関する説明を入居契約段階で実施している。現在、重度化には至っていないが、個人で大きな状態変化があった場合には十分な説明を行っていくようにしている。	入居時に利用者・家族に「看取りに関する指針」「終末期ケア対応指針」を説明し同意書を交わしている。重度化の際、医師から家族に説明し意向を確認し、看護師、職員と連携を図り支援を行う。本年1月事業所では初めての看取りを行った。意向に沿った支援により、家族からは感謝の声を得ている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時マニュアル等の設置を行い、周知を図る。今後もマニュアル等を元に定期的に研修等を設け実践力を全スタッフが身に付けられるように努めたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時マニュアル等を設置し、定期的に避難訓練の実施を行っている。	年2回避難訓練を行っている。3月には夜間の火災想定で通報、初期消火、避難経路確認を利用者・職員20名で行った。職員のほとんどは近隣在住で、すぐに駆け付けることができ、連絡網も整備している。夜間は夜勤者2名と宿直者1名であるが、コロナ禍による自治会活動の自粛もあり地域の協力体制は築けていない。備蓄品についても不十分である。	近年、想定外の浸水被害が頻発しており、自然災害対策は欠かせない。現在、法人でBCPを策定中であるが、利用者状況、職員体制に基づく事業所独自の対策を作成し、職員研修・訓練に加え、地域と協力し合える関係づくりの構築を期待する。災害備蓄品は水、食料品を最低でも3日分事業所2階に置く事を望む。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人権擁護・虐待防止委員会の実施時の聞き取り、日頃から声掛けやケアの中で不適切なものはないかなどグループホーム全体で現状の把握に努める。適宜個人面談指導、委員会やカンファレンス時にケアや対応について全体に問いかけ話し合う機会などを設けている。	接遇を重点項目として、入居者一人一人を尊重し、常に入居者本位に考え、職員全員が家族に入居してもらいたいと思える事業所づくりを目指している。不適切対応には管理者・介護主任が個別に注意するが、なぜそうなったのかの経緯を聞き、改善するようにしている。職員間での話し合いでは入居者名ではなく部屋番号で話すようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ケアプランを元に、本人の希望や意向の表出を行い、自己実現・自己決定の支援に努めている。現場でのケアとしては声掛けに選択肢があるように意識し、少しでも希望を聞き取ろうと働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その人自身の性格や生活リズムなどをできる限り把握し、その人のペースを大切に、希望に沿った支援ができるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自身では難しい方にも、モーニングケアや離床の際など一緒に鏡を見て髪をとかしたり、髭を剃る、朝は洗顔温タオルを全員に用意するなど、支援を行う様に努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	普段の食事や食事レクの準備などの際には一緒に行っていただけのように声掛けし促すよう努めている。後片付けに関しても、しっかり洗いきれない方にも行ってもらえるようにスタッフでフォローし、二度手間になっても実施している。食事やおやつレクの際は入居者様が好きそうな物で、普段食べられない物を作り、食事を楽しんでもらえるように工夫している。	通常は食材業者による献立と調理済み食品を職員が温め提供している。外出・昼食・おやつレクレーションなど食事を楽しむ・調理を楽しむ・おやつを楽しむなど工夫を凝らしたイベントが毎月ある。6月からは感染症対策を行いながら、家族参加のイベントを開催、7月はひつまぶしを利用者・家族・職員一緒に作り楽しい昼食会となった。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	月初に、体重測定の実施。3カ月に1度の血液検査などを実施する中で状態の把握に努めている。1日の把握に関してはチェック表を使用して全体で把握できるようにしている。水分や食事摂取量が少ない方には家族様に本人が好きな物を差し入れしてもらうように依頼している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	本人の状態を把握しながら、適宜声掛け等を行いながら実施していただいている。また、歯科往診の際に口腔ケアに必要な情報を確認している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	チェック表への記入を行い、その人のリズムや間隔の把握に努め、自立に向けた支援を実施したり、尿測を行いその人に合ったパッドを使用できているか確認を実施している。	おむつ使用者は1名、布パンツ・リハビリパンツにパッドの利用者が半数ずつである。利用者それぞれの排泄パターンを把握し、こまめな声掛けを行うが自らの意思でトイレでの排泄ができるよう支援している。夜間は2時間ごとに巡回し、睡眠を妨げないように支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	現在、コロナのこともあり運動量の低下などもあるのが、活動や施設内を散歩するなどして適度な運動を行っている。便秘の改善が見られない場合には看護師へ報告相談し、状況に応じて下剤を使用し排便コントロールに努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	可能な限りその人の希望やタイミングで支援を行えるように努めている。曜日を決めた方が安心される方もいるため、個々にあった支援を行っている。	入浴日は週2回の午前中としているが、出来る限り利用者の意向に沿うようにしている。個浴とリフト浴があり、現在4名がリフト浴を利用している。リフトチェアに腰掛けのまま湯船につかることができ、利用者・職員共に負担なく入浴できる。入浴拒否の利用者には、ひたすら世間話をして、気分が上がってきたタイミングを見計らって声掛けをしている。	

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中は、安眠されると昼夜逆転などの懸念もある為、昼寝・夕寝などその人の体調や状態に合わせて支援を行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方が新しくなった場合など、薬情をユニットにも保管し各スタッフが把握に努めている。また、降圧剤・利尿剤などの服用開始の際には副作用などの症状伝え様子観察できるよう努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	楽しく、気分転換をしてもらえるように毎日の活動、生活リハ、外気浴、散歩等を取り入れ、行事や創作活動なども毎月積極的に取り入れ支援している。嗜好品についても家族様に差し入れとして持参していただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	可能な限り外出支援に努めているが、コロナの影響もあり思う様な支援には至っていない。ユニット毎の玄関を使用し、庭先に出て外気浴や近場の散歩を楽しむなどの支援は適宜実施できている。	日常的には周辺散歩や洗濯物を干したり、取り込んだり、花の水やりをする際の外気浴にとどまっている。3月には近隣の公園にアーモンドの花を見に出かけ、4月は川沿いに咲く満開の桜を見に出かけた。9月には事業所前の広場で花火大会を開催予定で家族も招待している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、お小遣いを所持されている方もいらっしゃるがコロナの影響で、自身で買い物へ行きその方の希望通りの買い物などは行けていない。		

自己	外部	項目	自己評価 実践状況	外部評価	
				実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族様にも確認をし、可能な方に関してはある程度自由にやり取りをしていただけるよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用部に関しては、生活リハビリの一環として一緒に掃除をしていただく事で生活感を取り入れるよう支援している。また、季節感に関しては創作活動で季節に合った壁紙などを作製し、フロアに飾ることで感じていただけるよう支援に努めている。	居間兼食堂は大きな掃き出し窓があり、掃除も行き届き明るく清潔感がある。窓からは緑の木々とゆったりとした歩道が見える。壁面には壁掛け式テレビがあり、体操のDVDやカラオケを楽しむことができる。ひまわりの貼り絵や職員の笑顔の写真もある。食事時にはクラシック音楽が流れ、穏やかで落ち着いた共用空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用部がやや狭いこともあり、独りになれるような場所は現状設ける事はできない。居室＝家という認識で一人になりたい方や気分を落ち着かせたいときは自室を利用されている方が多い。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内の調度品に関しては、入居前に使用していた物などを持ち込んでいただいたり、馴染みの物を置く事で居心地よく過ごしていただけるよう工夫を行っている。写真なども持参して飾っていただいている。	洗面台、エアコン、防災カーテン、ベッド、換気扇が備え付けである。畳敷きの居室(各ユニット2室)もある。整理ダンス、ソファ、テーブルを持ち込み、趣味の大正琴や猫のぬいぐるみを飾り、居心地の良い居室となっている。冷蔵庫を持ち込んでいる利用者もいる。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	やや狭い部分もあるが、狭い事を活かし導線の確保などもしやすい為、安全かつできるだけ自立した生活に繋がるよう支援が行えている。また、トイレの場所などもわかりやすく表記する事で自立した生活に繋がっている。		

(別紙4(2))

事業所名 グループホームお多福の家

目標達成計画

作成日: 令和 5年 9月 7日

目標達成計画は、自己評価及び外部評価結果をもとに職員一同で次のステップへ向けて取り組む目標について話し合います。目標が一つも無かったり、逆に目標をたくさん掲げすぎて課題が焦点化できなくならないよう、事業所の現在のレベルに合わせた目標水準を考えながら、優先して取り組む具体的な計画を記入します。

【目標達成計画】					
優先順位	項目番号	現状における問題点、課題	目標	目標達成に向けた具体的な取り組み内容	目標達成に要する期間
1	35	災害緊急時の飲食備蓄が現在されていない為、早急に備蓄して非常時に備える必要がある。また、水害時に近場で避難できる所がない。	備蓄に関しては早急に揃える。水害時の避難場所も早急に確保する。	備蓄に関しては管理者だけではなく会社の上司にも相談し、購入検討を一緒に行ってもらう。そうすることで早急な対応が実現できると思われる。水害避難所は近くに4階建ての老健がある為、コンタクトを取ってもしもの時は避難させてもらえるように事前相談をしておく。	12ヶ月
2					ヶ月
3					ヶ月
4					ヶ月
5					ヶ月



注) 項目の欄については、自己評価項目のNo.を記入して下さい。項目数が足りない場合は、行を挿入してください。